

News Letter vol.49 2012.9.7

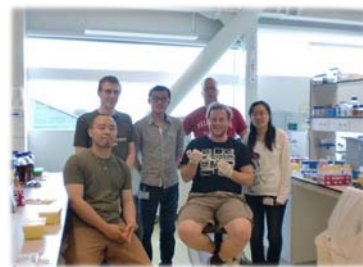
Groningen を自転車で走る。そんな日々。



研究室が入っている不思議な建物

私が主に滞在していたグローニンゲン (Groningen, オランダ語ではフローニンゲンと発音) はオランダの北部に位置し、ドイツとの国境にほど近い街です。多くの大学が居を構えており、若い学生が街中では非常に多く見られます。実際、オランダの中でも最も平均年齢が若い都市として知られています。また、ヨーロッパ各国だけでなく、世界中から多くの若者が学びに来ていることも非常に印象深いものでした。三ヶ月間滞在させていただいたグローニンゲン大学の Oscar P. Kuipers 教授の研究室にも、世界 15 カ国以上の国籍のメンバーが在籍しており、刺激的な環境でした。

研究室の規模としては 50 人ほどの大所帯であり、その中で、扱う乳酸菌の種類によって大きく 3 つのグループに分かれていました。私たちのグループは *Lactococcus lactis* グループの中のランチビオティックに関する研究を行っており、7-8 名で構成されていました。ランチビオティックとは、細菌が生産する抗菌ペプチド、バクテリオシンの中でも翻訳後にランチオニン環や以上アミノ酸導入などの修飾を受けた特徴的なバクテリオシン郡の総称であり、安定性が高く、抗菌力にも優れており、食品や医薬の分野における新たな抗菌物質として非常に期待されています。私が取り組んだ研究テーマも「新規修飾機構のランチビオティックへの導入」というものでした。



研究グループのメンバーと

今回、何より私が驚いたことは、研究室の体制の違いでした。私が九州大学で所属している園元謙二教授の研究室も 40 名ほどの大所帯なのですが、大半は修士、学部の学生と言えます。一方、Kuipers 教授の研究室では、ポスドクだけで既に 15 名以上在籍しており、それと同数程度の博士課程の学生がいました。修士の学生もいるのですが、彼らは基本的に、博士課程の学生やポスドクの研究テーマの補佐として実験をしていく中で専門知識や実験技術を身につけていく、という仕組みになっていました。つまり、研究活動の中心がポスドクであり、または博士課程の学生であり、成熟した研究集団という印象を強く受けました。博士課程の学生にはすでに自分自身で研究を計画、遂行していく能力が備わっており、ポスドクに関してはより成熟した研究者であることは言わずもがなでした。このような環境で研究を行ったことが私にはありませんでしたので、非常に刺激的で充実した研究生活を送っていく中で自身の成長も少しは感じていました。



研究室集合写真

また、滞在中に 2 度、国際学会に足を運ばせていただきました。フランスのリールではスペイン人の旧友 Juanjo と、イギリスのノッティンガムでは Cristina と再開を果たすことができました。ヨーロッパにおける同世代の研究者との交友関係は私の今後の人生において何者にも代え難い貴重なものとなりました。また、同世代の研究者だけでなく、Kuipers 教授やフランスの Djamel Drider 教授、ノッティンガムにてお話をさせていただいた Colin Hill 教授など、世界屈指の研究者の方々とは直接言葉を交わすことができ、今後につながるきっかけをもてたことがとても幸せだと感じています。本プロジェクトの関係者各位には、このような貴重な機会を与えてくださったこと、深く感謝申し上げます。どうもありがとうございました。